

食後の小話

池沼妖怪ブレインロスト

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ホラーはあまり多くありません。
書きたいことだけを書いていきます。

目次

子供の話	1
ギャザ妄想カード	3
救いの手は自分の行動力	6

子供の話

「少女がね、ここにいたんだよ」

唐突にそう話す父親の顔は大真面目だった。

「嘘じゃあない。そこにいたんだ」

ついカチャカチャと今まで食器を片付けていた手を止めてしまった。

「何言ってるだよ。誰もいないじゃないか。ついにボケたか」

「違うんだ。ボケてない：はずだ。そこで俺と一緒に飯を食ってたんだよ」

「父さんと食ってたのは俺だけだろ？何を言ってるんだよ」

定年を迎えて十数年の父親に呆れながらチマチマと片付けを再開する。

そこで気づく。今まで私は3人分の食器を片付けていたことに。

「ああ。食ってたんだな」

目の前の少女に微笑みかけ、私は食器を洗うのであった。

三番目だったか、最近増えすぎて顔が覚えられない。

この子は手が小さいな。

社会に出て、人の恐ろしさというものが身にしみてわかってきた頃くらいからだろうか、私は完全に女性不信となっていた。

近寄ってくる女性は皆、心の中に黒い一面を抱えており、男が隙を見せたところに食らいつく恐ろしい生物だと思いきんでいた。

というのも、女性が原因の金銭トラブルが数回あったからである。

女はダメだ。超個人主義過ぎて合わせることができないし合わせてもくれない。

心身ともにボロボロだった私の癒しは、通学・帰宅の小学生を眺めることだった。

決してやましい想いを抱いているわけではない。

ただ単純に、無邪気に笑いながら友達と歩いている姿が微笑ましいだけなのだ。

建前や怨嗟にまみれたくだらしない社会を否定する姿がその瞬間あ

るのだ。

ある時である。

子供達を眺めながら夢うつつとなる中で、ある違和感に気がついた。

笑顔のない子供がちよくちよくと現れるのである。

背格好は他の子供よりも小さく、服装が少しばかりボロボロで、顔には涙の跡があった。

子供達の笑顔が見たくて眺めているのに、これでは興ざめである。

他の子供たちはその子に気づいていないようだ。まるでそこに居ないかのように振舞っている。

はてさて、これはイジメというやつなのだろうか。

そういうのを呑気に思っていると、そのボロボロの子供と目が合った。

気まずい。

まずはそれだった。

そして気づく。

何かがおかしい。

あんなに生氣のない顔を見たのは初めてだった。

精神的にまいっていた時の私より酷い。

というより、生きているようには見えない。

なるほど、こういうのが幽霊というものか。

変に納得した私は、何を思ったか、その幽霊と思わしき子供に対して手招きしてみた。

それ以降これである。

時々やってくる子供に飯を作ってやるのだ。

何故そうなったのかまでは覚えていない。

ただ、

「君たちは嬉しそうに食べるから私は好きだよ」

彼らの笑顔が見れる行幸が訪れたというのは間違いはない。

ギヤザ妄想カード

退職の決意 ③白白

エンチャント

あなたは呪禁を持つ。(あなたは、あなたの対戦相手がコントロールする呪文や能力の対象にならない。)

各対戦相手がコントロールするパーマメントを任意の回数殴る事ができる。各対戦相手がそれを妨害した場合、退職の決意のコントロールはそのプレイヤーを殴りつける権利を得る。

「今すぐ暴力行為をやめるんだ!」「いや止まらない!俺はもうこの会社を辞めるんだからな!」

―上半身裸

のビジネスマン

――

酒乱の粗暴者 赤赤

クリーチャー 人間・大工

速攻(このクリーチャーは、あなたのコントロール下で戦場に出てすぐに攻撃したり(T)したりできる。)

威迫(このクリーチャーは2体以上のクリーチャーによってしかブロックされない。)

酒乱の粗暴者は、可能なら毎ターン攻撃する。

あなたのアツプキープ開始時に、酒乱の粗暴者を追放し、対戦相手のクリーチャー1体に1点のダメージを与える。

「休みくれヨオ!」

―親方を殴る新

米

2/1

――

野菜を焼く焼肉屋 2緑

ソーサリー

あなたはこのターン中、肉を焼くことができない。

各対戦相手がコントロールする植物クリチャー1体を墓地へ送ることができる。

焼肉屋なのに野菜を焼くなんてナンセンスだ。野菜が食いたきや焼き野菜屋に行け！

—————

打算的な善行 3 黒黒

ソーサリー

この呪文の追加コストとして、あなたの手札1枚を墓地へ送る。プレイヤー1人を対象とする。そのプレイヤーはこのターン手札を公開したままにする。

あなたはそのプレイヤーのライブラリーの一番上から10枚を見る。その後あなたが望む枚数をライブラリーの底へ置き、残りの枚数をあなたが望む順番でライブラリーの一番上に置く。

きみのためだ。私に任せておけばすべて安心さ。

—————

転職者の未熟な知恵 2 青

エンチャントトプレイヤー

エンチャントされたプレイヤーがドローフェイズ以外のタイミン
グでドローをした場合、転職者の未熟な知恵のコントロールはド
ローされた半分の枚数をドローする。小数点以下は切り捨てるもの
とする。

たしか…これで良かったと思います…多分。

—————

積み木の祭壇 3

アーティファクト

積み木の祭壇のコントロールはそれをコントロールする限り子
供と遊ばなければならない。

(T) あなたのライブラリーの一番下から2枚を見ることが出来る。
あなたはそれをライブラリーの一番上へ望む順番に置いてもいい。

パパがお仕事遅くまで頑張ってるから、神さまにパパが健康でいら
れるようにお祈りしてるの。

救いの手は自分の行動力

今までは評価を上げるために仕事をしていたのに、現在は評価を下げない為に仕事をしている。

この違いは非常に大きい。

そもそのモチベーションが違うのだ。

やりたいのと、やらなくてはいけないのでは楽しさや感覚は雲泥の差だ。

「ちっ！このくらいの仕事やっておけよ！」

押し付けられた仕事をこなしながら、誰に向かって言うのでもない悪態をつきながら片付ける。

最近、暗い独り言が増えた。

昼休憩の時間になった。日曜日の昼下がりである。

私はスーパーの休憩コーナーで安めの惣菜弁当をもそもそと食べていた。

ふと目を向ければ、友人と仲良く勉強をしている高校生達の姿が見える。塾帰りだろうか？休日なのに大変だ。

ギトギトで身の少ない唐揚げを頬張りながらそんな感想を抱いた。

早く食べてしまわないと、休憩時間が終わってしまう。

食べるスピードを私は早めた。

弁当を食べ終え、スーツについた食べかすを払いながら思った。

私も、彼らみたいにもっと勉強してもっと良い大学を出て、ちゃんと就職活動をすればこんな生活を送ることはなかったんだろうかと。

ピリピリとやかましい音が胸ポケットから鳴ってくる。

「はい。」

職場からだった。

「あ、高下くん？悪いんだけど、今度の希望休取りやめてくれないかな？」

「えっと、何故でしょうか？」

「どうせ遊ぶだけでしょ？だったら土日休みに希望日入れないで欲し

いんだけど」

「それは…」

「はい！本人の了承得たしこっちで取り下げといたから。早く休憩から上がってね。じゃ」

切られた。

何も言っていないのに。

ようやく掴んだあの子との初デートだったのに。

私はその子にデートが潰れてしまったことを連絡している間に、また電話がきた。

今度は良い連絡だった。

高校以来仲の良かった仲間からである。

「なあ、話があるんだ。休みが合う時、飲みに行かないか？」

「まさかこんな歳になってシフトか。辛いなそれは」

週のド真ん中、まだ席の空気が目立つ程度の時間である。

空になった中ジョッキを眺めながら友人はそう言った。

「ガタが来て以来、夜勤はドクターストップがかかってな。同僚からの当たりがキツくなった」

「苦労してんだな」

ため息をつきながら彼は言う。

そういうこいつも苦労の跡が少なからず見える。

白髪が増え、顔に疲れが残っているのは私の気のせいだろうか。

しかし、どこか自信にあふれた表情をしている。

少なくとも私よりは上手くやっているようだ。

「お前は？」

少々の劣等感がザワザワと湧いてはいたが、それを抑えつつ友人に尋ねる。

「そう！聞いてくれ！会社を立ち上げないか!？」

「会社？起業するののか？」

「ああそうだ！というかした！」

「相変わらず行動力のあるやつだな」

「ははは！褒めてくれるな。お前を呼んだのもその事についてなんだ」

「どういう事だ？」

「このご時世にぴったりのサービスをしてな。ノリに乗ってるんだ。会社の営業成績はうなぎ登りだ。で、今、俺の会社には人手が足りない。一人でも多くの人員が欲しいんだ。ここまで言えば察するだろう？」

「俺に来ていつてか？」

「そうだ。学生時代からの付き合いだったお前なら任せられる仕事のアイデアがどんどん湧いてくる！」

「無理だよ俺なんか」

「そこはわかっている。お前も歳が歳だし、俺も払える金額も大して多くない。月の給料は手取りで30万くらいしかやれないが…」

月30万？おいおい、今の給料のほとんど倍じゃないか。

「正直な話をする、その話は魅力的だ。給与面も申し分ない」

「そうか。それは良かった」

「ただ、今のところが長すぎて辞められるか…」

「よし、それじゃ俺も正直に言おう。信頼できる社員が欲しいのは事実だが、別にお前じゃなくても良い」

「あんまりな言い方だな」

「ははは！まあまあ」

「それはどこの企業だってそうだ。もちろん、お前の今の会社もな。ベテランのお前が突然居なくなろうがどうってことはない。特にお前の場合、同僚からの風当たりが強いんだろ？さっさと辞めてしまえそんな会社」

「それもそうなんだが…」

「とにかく、俺はお前に来て欲しいと思ってる。なに、ヘッドハンティングみたいなもんさ。お前の能力が欲しいんだ」

夜は更けていった。

私はどうしようもなかった。

たしかに給料も増えるし、環境も良くなるのだろう。

しかし、何か言葉で言い表せない壁が私の心の中に出ており、それが決断を阻むのだ。

今の今まで私が心血注いで尽くしてきた会社を辞めて、他に移るのが悪いと思っているのだろうか。

いや、もしかするとプライドなのだろうか。

会社が本当に私を必要としているから、私が消えてしまったら仕事が回らなくなってしまうと思っているのだろうか。

彼の言ったことは真実だろう。

私1人居なくなつたところで全く支障はないのだろう。

認めたくないのだろうか。

私はこの腹に溜まっている真っ暗で思い何かを持ち歩きながら仕事へ向かった。

休みがどんどん減らされている。

休憩時間も取れないほど忙しい。

その反面、同僚や後輩は手持ち無沙汰のようだ。

私がこれだけ働いているのに。

夜勤に入れないというだけでここまで私がやらないといけないのか。

「高下さん、ここら辺もサクッとお願いしますよ」

携帯をいじくりまわしながら回転椅子に踏ん反り返って座る後輩が言った。

私のPCにタスクがどんどん増えていく。

彼の仕事だ。

夜勤ができなくなったという事で反発を買って以降このざまである。

上司も黙認している。

「何やってんすか？さっさとお願いしますよ」

この若者は完全に私を馬鹿にしている。

私は上司の方を見る。相変わらずネットサーフィンに勤しんでいる。

この部署でまともに働いているのは私だけだ。

「何してんの？さっきと仕事したら？」

上司からの声だ。

もし、私が居なければ彼も後輩も仕事をするのだろうか。

ここで低賃金でストレスを溜めながらこき使われるよりも、友人と共に楽しく仕事をした方が良いのだ。

何でこんな簡単な事が分からなかったのか。

いや、理解しようとしなかったのだろうか。

「室長。お話があります」

変わろう。自分に甘くなろう。そうしよう。

仕事が終わりに、私は友人に電話をかけた。

「もしもし、山野か？あの話だが…よろしく頼む」

いくら過去に未練や後悔があろうとも、私は過去に戻りたくはない。今のくだらない人生を更に否定する事になるからだ。

それは今まで生きてきた私自身を否定する事と同じ意味だ。

だから私は今日。少しでも、少しでも暗澹とした生活から抜け出せる蜘蛛の糸を離さないように、落ちてしまわないように。しっかりと握って登っていった。